

2004年 秋号

ぷらう 31号



発行：TEACCH プログラム研究会

光とともに・・・を監修して

内山 登紀夫

1. 「女性の成長の物語」

「光とともに」テレビ版のコンセプトは女性の成長の物語なんだった。プロデューサーからそう説明されたときに「ふむ」となった。「自閉症の物語なんです」と聞いたら、そう答えがとてもキッパリと返ってきたのだった。プロデューサーという役割もその時はよくわかっていなかったが、実はかなり偉い人(らしい)なのだった。まあ、ちょっとADHDっぽい人だけど、そう女性にきっぱりと言われると、思わず「はい」と素直になってしまう自分も普通の自分だった。でも、それで腹は決まった。主演は篠原さん、光君じゃないんだ。それにしても、「自閉症と正面から向かいあう」というコンセプトもある。主演でないかもしれないけど、準主演だろうし。視聴率第一にする気は無いということだったし、センセーショナルなつくりはしないと約束してくれた。まあ、色々あって(断れない性格とか)医事監修をすることになったのだった。

2. ターゲットは一般人

さてテレビ局は視聴率狙いはしないと言ったけど、実はこちらは視聴率を欲しいと思った。なにしろ光君が毎週登場するのだ。テレビの影響力はすごい。関東地方だけで世帯視聴率1%＝約16万3千世帯だそうだ。ちなみに視聴率には個人視聴率と世帯視聴率があってなんてことも勉強してしまった。1%が全国で30万世帯くらいになるらしい。そうすると10%とれば300万世帯！一人でみても300万人、二人でみれば600万人、20人でみれば日本の人口じゃん！！なんて無意味な計算が頭の中を駆け巡った。自閉症の啓発にこんなに有効なメディアはない。こちらから啓発しようと思ったら、一時間何万円(何千万？よくわかりません)も払わなきゃいけないのに、向こうから啓発してくれると言っているのだから使わない手はない。一応10%が人気のあるなしの目安らしいので、頭に描いたのは300万人の人々だ。この300万人は自閉症なんてほとんど知らないだろう。TEACCHも特別支援教育も認知障害もしらない正真正銘のトウシロだ。



300万人のうちに95%以上は自閉症の知識皆無だろう。親や専門家のごく一部だ。一般人がまた次もみたいというドラマにして欲しいと思った。300万人が10回以上みれば、自閉症のイメージがつかめるだろうと思った。ということで、視聴率チェックは毎週やってました。敵は「オレンジデイズ」とか「電池が切れるまで」だったけど、一番悔しいのは「アットホームダッド」に負けることで、「篠原さん、あっちは手を抜けよ」と言いたかった。

3. 教科書じゃないよ

実は医事監修を引き受ける前から色んな注文が届いていた。原作の帯に推薦文を書いたりしていた関係かもしれない。どちらかという、「きちんと正確に伝えないと怒るよ」といった内容が中心で、

ちょっと先が思いやられる感じで溜息がでる思いだったが、まあドラマはドラマである。とにかくターゲットは一般人。教師を目指す学生や医学生が自閉症をドラマで学んでは困るのである。枝葉末節にこだわってはドラマとしてつまらないだろうし、自閉症のさまざまなタイプを紹介しようなどと思ったら、ゴチャゴチャしたドラマになるだろう。レインマンが成功したのは、レインマンに絞って描いていることもあるだろう。光君タイプでない自閉症スペクトラムの子どもを持つ親から、批判があるかもしれないとは予測していた。「君が教えてくれたこと」でも自閉症の子どもの親から「主人公は自閉症じゃない」といった意見がたくさんあったそうだ。どう描いたって批判はあるだろう。医事監修者としてできることは一人の自閉症の子どもの姿を、できるだけ正しく伝えることと、自閉症の子どもの指導の場面で不自然さを最小限にすることだろうと思った。プロデューサーからはシナリオのチェックをするということ、撮影の現場に立ち会う専門家を紹介して欲しいという二つのことを依頼された。幸い、TEACCHにも自閉症にも詳しい妙齢の独身女性の専門家がみつかった。本人は自分の存在を公にはしたくない、匿名にして欲しいということで仮にX女史といおう。自分の存在を公にしたくない妙齢の女性というと、なんとなくすごい美女のような根拠のない妄想をもつ読者もいるかもしれないけど、何を申そう、それは妄想です（まるで門先生だなあ）。X女史は療育指導という立場で撮影に立ち会うことになり、もう一安心。あとはシナリオを読んで意見をいうということで何とかかなりそうだったと思った。でもこの時点では医事監修の仕事なんてなんもわかってなかったのである。

4. シナリオって？

シナリオなんてものを初めて真面目に読んだ。シナリオはシナリオであって小説ではないのだ。役者さんの台詞はきちんと書いてあるが、情景描写とか光君のしぐさとかを書いてあるわけじゃない。それに光君はほとんどしゃべらないので台詞はないのである。じゃ、何をどうチェックすればいいのという感じだ。とりあえず大人の台詞をチェックしながらごく簡単に書いてあるト書きの部分に朱を入れることにした。でもねえ、「朝顔教室、光の家、中に入っている光」なんてト書きみたって、なんもわからないのである。「光の家」ってどんなんだっけ、「中に入っている光」は何してんの？何分いるの？リオ先生はどこにいます？課題はなんだ？わからないことだらけ。わからないのでプロデューサーに聞くと「そこを考えてください」なんだな。シナリオに書いてあることはごく一部で、それを映像に再現するのは、かなりのイマジネーションが必要だった。実際にシナリオ読んで映像が浮かぶようになったのは5、6回を超えてからだった。



5. 第一回試写会

さて第一回である。第一回の撮影は、なにしろ最初なんで、かなりの場面に立ち会った。ネット情報には医事監修者はシナリオチェックだけで撮影立会いはしないなんて決め付けていた人もいたけど、なにしろ内山はミーハーなんだ。生篠原涼子さん（お友達だから「さん」づけです、うらやましいでしょ）、生鈴木杏樹さんとかを見れるんだから立ち会わないわけないでしょう。もっとも流石に大学の授業が始まると立ち会える回数は減ったけど。でも、立ち会ったら立ち会ったで、どこまで言うべきか難しい。光君の役をやった子役は二人とも上手だったけど、だからって本物にはどうやっても見えない。でも一般人からみれば自閉症と矛盾のない行動をしているよねという範囲で妥協するしかないです。だって子役は自閉症じゃないからね。そういう風にみればダスティン・ホフマンだって自閉症には見えない。当たり前だ。

シナリオで「家で荒れる光」と書いてあっても、どの程度荒れるかなんてのは、現場で監督とか助監督が決めていくわけだ。自閉症の子どもの荒れ方なんてピンキリだから、どうやってもリアリティがないし、逆にどうやっても、それなりにリアリティがある。じゃ、医事監修なんていらんじゃんなんて思う人もいるだろうけど、そうかもしれないです。で、第一回の試写会が日本テレビであった。応募してきた一般の人が中心だが業界人とか自閉症協会なんかの関係者もいた。戸部さんもいました。第一回では光君がアルミ箔を捜し求めて、引っ越したマンションで引き出しを全部あけたり、本棚を

かき回すシーンがある。試写会のあとで、親の会のある人が寄ってきて言いました。「内山先生、いくら自閉症でもあそこまで部屋をかき回す子どもはいない」。その後、顔見知りの親の人に挨拶すると、この人は「内山先生、自閉症の子どもがこだわって物を探すのはあんなもんじゃない。ウチは光君の何倍も大変でした」。どっちの意見もホントなんです。でもそれで吹っ切れました。

6. 色々な異論

さて、実際に放映されると、沢山の意見が局にも公式サイトの掲示板にも、その他の掲示板にもアップされた。どちらかといえばお褒めの言葉が多かったけど、批判ももちろんありました。予想通りといえば予想どおりだけど、批判は一部の親と一部の教師が多かったようです。たとえば光君が石を丸く並べるシーンでは、「自閉症は丸く並べない、ウチの子（生徒）はまっすぐ並べる」なんてのがありました。丸く並べる子どもも沢山いるんだけどね。面白かったのは一部の教師の反応で、教育現場にリアリティがないという批判が多かった。リアリティというのは難しい問題ですね。全く荒唐無稽でも困るけど、まったくリアルだとそれも困るんじゃないですか。例えばリオ先生が TEACCH メソッドを完璧に使うのもリアリティがないし、かといって大多数の特殊学級のようにリアルに自閉症も知的障害もほとんど区別しないで無手勝流に教えている先生を出しても困るでしょう。原作はかなり TEACCH を意識しているしね。児童一人の特学なんてないという意見も沢山教師から頂きました。でもね、川崎市とか横浜市には一対一の特学って結構あるんですよ。なかには「医者だから教育のことは知らないでもしょうがないですけど」とかメールくれる人もいるけど、教育現場って地域によって



さまざまなんだな。一番噴き出したのは人事異動の話で、リオ先生がもらす場面、「異動の話は秘密なのに、あんなに簡単に漏らすのは監修者が教育現場を知らないからだ」という意見。おい、これはドラマだぞ。大体、教師の人事異動がどれだけ親の強い関心ごとなのかこの教師は知らないのかな。灯台下暗しとは、このことだ。児童精神科医を 15 年もやっていると、毎年秋から冬にかけては、次年度の担任教師は誰になるかで親はハラハラドキドキ。良い先生だったら次年度も持って欲しいし、困った先生だったら変わって欲しい。次年度の先生を教えるなんて親から言われて、「わからん」「そんなこといわん」というやり取りで一体どれだけの診察時間を空費していること

か。でも、結局次年度の新学期にならないと誰が担任かわからないんです。親（児童精神科医も）が教師の人事異動にどれだけ関心があって、どれだけ情報を欲しがって、結局得られず切歯扼腕しているか、現場の先生は知らないみたいです。自分たちの影響力の大きさに気づいていないのね。謙虚といえば謙虚だけど。大体現実の教育現場とドラマの教育現場が違うことなんて当然なのね。でも勉強になりました。多分、どの職種の人でも自分の現場は自分が一番知っているって自負してるんですけど、実はそうでもないってことですね。医者は医療現場のことを知っているかということでもないんです。自分は開業するまでの公務員勤務医時代、自分の患者がいくら払っているかも、自分がいくら稼いでいるかも知りませんでしたし。

7. ではおしまい

「光とともに」はドラマとしては成功したと思っています。原作はもちろん良かったし、篠原さんや斉藤君の演技も良かった。特に脚本が良かったです。脚本家の水橋さんは、若くてスリムできれいな人です（関係ないか）。水橋さんと打ち上げの時は「スペシャルやろうね」と盛り上がったけど、こういうことはプロデューサーが決めるんだそうで、今のところスペシャルも続編も内山には話はないですね。「アットホームダッド」はスペシャルやるけど。ということで医事監修は大したことはしていません。×女史が良かったです。

最後にちょっと困った話を。好意的なメールにも色々あったけど、オイオイとうなってしまったのは一部の特学や養護学校の先生からのメールで「光とともにで勉強しています」というやつ。医者が「白い巨塔」で手術の勉強したり、「セカチュー」で白血病の治療を勉強したりするのは困るように、「光」で TEACCH とか自閉症を勉強しないでくださいな。あれはドラマです。専門家は専門的に勉強しましょう。

2004年トレーニングセミナーIN愛知について

愛知支部 小川 真紀

2004年8月20日～22日の3日間にわたり、愛知県大府市においてトレーニングセミナーを行いました。会場は大府市福祉会館と隣接する大倉公園内の休憩棟を使用しました。(大府市のご厚意により無償でお借りできました!) 休憩棟は木造平屋の離れで手入れの行き届いた公園内にありとても落ち着いた雰囲気のところでした。しかし、主催者側として、心配なことがいくつかありました。講義と実習の場所を行き来していただかなくてはならないこと。もう一つは冷房の件。愛知県はただでさえ猛暑の地。木造家屋では冷房を効かせても大勢の人が入ると暑くて大変なのではないかと、扇風機を持ち込んだり、扇子を皆さんに配ったりしてみました。

前日まで台風の行方を気にしていたのですが、台風が暑い空気とおまけに雨雲も吹き飛ばしてくれ、セミナーの間は何とか傘をささずにすみました。(3日目の夜遅くには待っていたかのように、土砂降りの雨が降りましたが、・・・)

トレーニーの皆さんからの感想で「畳に座っての受講はつらかった」「セミの声がうるさかった」との声をいただきました。セミといえば、ある協力児さんは「トレセミにいくよ!」といわれて、「取れ蝉(セミ)」「セミ取る」と思っていたとのこと。2日目には虫取り網を持って登場というエピソードもありました。ハードスケジュールにトレーニーの皆さんは緊張の面持ちで真剣そのもの。講義を聴き、ミーティングでは熱く語り、実習に汗しておられました。

今回はスケジュールの関係で3日間を通して一人のトレーナーの先生にひとつのグループを担当していただきました。そのためかトレーナーの先生方やトレーニーの方々との交流は深まり、閉講式の時にはさながら卒業式のように式が終わってからも記念撮影が続き、皆さん去りがたい雰囲気でした。

2004年のトレーニングセミナーに産声を上げたばかりの愛知支部が立候補したものの、本当にやり遂げられるか不安でした。が、トレーナー、講師の先生方や協力児・者、その家族の方に支えられ、20人を超える実行委員の奮闘で作り上げることができました。仲間と共に学ぶこと、チームワークの大切さを痛感した3日間でした。

平成17年度総会のお知らせ

日時:平成17年1月22日(土) 18:30～

会場:ハートピア京都(京都府立総合社会福祉会館)

※第6回実践大会1日目 終了後,同じ会場で行います。

議題:

- ・平成16年度活動報告,決算
- ・平成17年度活動計画,予算…など